群読の目的

群読と読解

読解を終えてからの群読か、読解しつつの群読かといった議論があるとします。このことに意味はありません。群読をすることは、すなわち読解をすることです。表現するためには理解が必要です。理解が深まれば表現も高まります。また、表現する目で作品を見ることで見えないものまで見えてきます。最初から群読をする構えで、文章に当たるのが自然です。

群読をするためには、必然的に分読が必要となります。文脈のどこで区切るか、区切った部分を誰が読むか。読み分かちと読み担いは、作品の内容と文脈を分析することによって決定されます。それは作品の解釈そのものです。作品の解釈を土台にしたイメージ化が群読をつくります。

一人で読むか。二人で読むか。グループで読むか。群で読むか。男声か。女声か。混声か。高い声か。柔らかい声か。強くか。弱くか。遠くに響かせるか。周囲に散らすか。これらは、作品のイメージ化そのものです。作品の理解でもあり表現でもあります。

また、群読では、解釈と音声化とが相乗的な効果となって互いを刺激します。さらに、群読では、理解活動と表現活動とが、子どもたち相互の協働学習によってなされます。教師中心の一斉授業ではない、子どもたちの主体的な学習が成立します。群読の学習では、個のプランをつくる時間を保証することが特に大切となります。

群読と発声

発音・発声ではなく発声・発音です。群読にとって発声は大切です。群読そのものが発声です。群読のための発声・発音の練習は、国語の授業の中では必要ありません。群読の練習をしながら発声の練習もするという心構えでいいのです。伸び伸びした姿勢で、腹の底から声を発することです。体が解放されていなければ、透る声、響く声は出ません。姿勢と息の継ぎ方と声を当てる目標とに注意をして、群読をしながら発声訓練をすればよいのです。

群読と表現活動

子どもたちにとって大切なのは、自己を表現することです。群読はその一つにしかすぎません。教師が群読を勧めたからといって、学級の全員が群読を好きになるとは限りません。中には、やはり群読は苦手だという子どもがいて当然です。そのほうが自然です。群読の押しつけは避けたいところです。

要は、群読を好まぬ子どもが、他の自己表現の術を持っているか否かが問題です。その子どもが、絵でも、ピアノでも、水泳でも、自己のエネルギーを外に発散させる一つ以上の方法を持っていたとしたら、教師はそれで満足すべきです。

国語の教師の立場からすれば、それらの中でも国語に関する表現方法を好きだとする子どもがいればうれしいでしょう。さらに、国語の中でも話すことや朗読や群読を好きだとする子どもが現れれば、なおのことうれしいというだけのことです。

群読を指導する目的の一つは、子どもたちに自己表現の喜びを味わわせ、表現することに対する関心や意欲、主体的な態度を育てることにあります。